

ぶっきょうつうしん
仏教通信

こどく
『 孤独について 』

がつごう
10月号

じょうどしんしゅう じゅうしよく ほうわ
浄土真宗の住職が法話(「じょうねんじ」YouTube)の中で、スポーツライターRyo Ishikawa
氏の「あいされないことがこどくなのではない 愛せないことがこどくなのだ」ということばに感銘
し、ぶっきょうてき かいしやく
し、仏教的に解釈していました。ほうわ ようやく
法話を要約すると「人はひとり生まれ、そしてひとり死ぬ
というこどくな せんざい
存在です。しかし、そのこどくだからこそ、わたしたちは互いにきさきあひ、きょうかん
共
に生
きるよろこびをわかちあうことができるのではないのでしょうか。ところが、おおくのひとがじぶんちゅうしん
自分の中心
のかんがえにとらわれ、こどくをかんじています。「自分は何ぞあいされないのか」という問いは、自分
自身の理想像に縛られ、しゅうい ひと
周囲の人々とのつながりをおろそかにしてしまうこころのあらわれかもし
れません。ぶっきょうの「むが」のしそう
思想は、この自己中心的な「我」からはなれ、たしやへのきょうかん
他者への共感
を育
むことへとつながっていきます。」というものでした。ぶっきょうでは、「わたし」というせんざい
存在は一人
で
生きているわけではなく、おおくのつながりの中で生きていることをおしえてくれます。そして、
しんらんしょうにん
親鸞聖人は、このことを「たりにき」ということばであらわし、わたしたちはあみだにょらい
阿弥陀如来の慈悲によっ
てすくわれると説かれたのです。ぼうとうの「あいされないことがこどくなのではない 愛せないこと
がこどくなのだ」というフレーズは、こころにつきささるすうど
鋭いワードでありながらも、わたしたちに
「愛すること」のたいせつさを教えてくれることばでもあります。「愛」とは、
じぶんちゅうしん
自己中心の「自己愛」や「愛欲」ではなく、たしやをおもいやり、とも
に生
きるよろこびをわかちあう「りた」のこころなのです。このたしやをおもうやさしさ
こそが、こどくをおそれる「わたし」をすくみだす道なのではないでし
ょうか。



がつしょう
合掌